

日本環境教育学会第 29 回年次大会（東京）テーマ

環境教育の根本に立ち返る： いのち、環境、人間

2020 年、日本環境教育学会は創立 30 周年を迎える。自然保護教育あるいは公害教育という形で始まったとされる日本の環境教育は、60 年の歴史を刻む。内容、方法、主体、対象、場、プログラムなどにおいて、その展開は実に多様であり多彩である。

国際的には、環境教育の取組みはほぼ半世紀の歴史を有する。その議論に駆動されて、「環境のための教育・学習」から「持続可能な社会の実現のための教育・学習」すなわち ESD へと転じた環境教育は、今日、2030 年をターゲットとする「人間、地球及び繁栄のための行動計画」『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ』（持続可能な開発目標、Sustainable Development Goals、SDGs）に応答する「持続可能な開発目標のための教育」（Education for SDGs、ESDGs）の段階にある。

これらを念頭に置いて、第 29 回大会では、百花斉放の環境教育の根本に今一度立ち返り、その消息を見極める議論を交流させたい。

大会テーマ

環境教育の根本に立ち返る：いのち、環境、人間

- ◆ いのち：一つの生き物が生き物として活動する根源の力としての「生命」、一つの生き物の生死を超えて連なる 38 億年に及ぶ生き物の歴史の物語「生命誌」、人間という生き物が「死」の問題に触れて実感することができる「いのち」、私たち人間が日々営む「生活」。
- ◆ 環境：生き物を取り囲み、相互に関係し合って影響を与える世界、いのちの場所。「生命」の世界／場所は「自然」であり、「いのち」の世界／場所は「いのちの世界」であり、人間の「生活」の世界／場所は「歴史的社會」である。
- ◆ 人間：人間は、生き物として、社会的存在として、また「いのち」の存在として、「自然」、「歴史的社會」、「いのちの世界」を含む環境と様々に関わり合いながら、ダイナミックに生きる。そのダイナミズムには、いのちと環境の互いに支え合う関係を逸脱して、不適正あるいは過剰な開発を行い、いのちと環境と人間を破壊する歴史も含まれる。この負の向きを転換するために、今日の SDGs（17 目標）は 5 つの柱を設定している。
 - ① 人間（People）：あらゆる形態と次元の貧困と飢餓に終止符を打つとともに、すべての人間が尊厳を持ち、平等に、かつ健全な環境の下でその潜在能力を発揮できるようにする。
 - ② 豊かさ（Prosperity）：すべての人間が豊かで充実した生活を送れるようにするとともに、自然と調和した経済、社会および技術の進展を確保する。

- ③ 地球 (Planet) : 持続可能な消費と生産、天然資源の持続可能な管理、気候変動への緊急な対応などを通じ、地球を劣化から守ることにより、現在と将来の世代のニーズを充足できるようにする。
- ④ 平和 (Peace) : 恐怖と暴力のない平和で公正かつ包摂的な社会を育てる。平和なくして持続可能な開発は達成できず、持続可能な開発なくして平和は実現しないため。
- ⑤ パートナーシップ (Partnership) : グローバルな連帯の精神に基づき、最貧層と最弱者層のニーズを特に重視しながら、すべての国、すべてのステークホルダー、すべての人々の参加により、持続可能な開発に向けたグローバル・パートナーシップをさらに活性化し、このアジェンダの実施に必要な手段を動員する。

学会 30 周年を前にして、第 29 回年次大会では、これらの言葉を手掛かりにして、参加者一人一人が自分自身に立ち返り、それぞれの環境教育の根本を尋ね、その消息を見つめ、省察し、そこから生まれてくる思いを互いに分かち合い、そして新たなる環境教育の種子と萌芽を発見し、そのいのちの芽吹きを大切に育てる方へ向かいたい。